

サクラと君

黄月

卒業式

三月。

長いようで短い義務教育期間がもうすぐ終わる。

久美子はぼんやりと卒業式に参加していた。

三年間の思い出や今日という日の感動はあるし、クラスメートと別れるのは寂しい。

四月から始まる高校生活を思うと不安と期待で胸が高鳴るのも他の子と同じはずだ。なのに久美子の心は別のモノにずっと囚われていた。

卒業式終了後、記念写真を撮って仲の良い友達家族と食事に行った。

その間も久美子のぼんやりは治らない。

卒業の余韻で仕方ないことか、と友達たちも親たちも久美子の様子を特別不審がることはなかった。

家に帰る道すがら、久美子はずっと心に引っかかっていた場所へ向かうことにした。

「ごめん、お母さん。わたしちょっと」

「どこ行くの？」

久美子の母は急に足を止めた娘を驚いた顔で見た。

「うん、えっとね……」

言い辛そうに下を向く娘に母は優しく笑いかけた。

「荷物、全部持って帰ってあげる。夕飯までには帰ってきてね。今日はお祝いだから。お父さんも早く帰ってくるし」

「お母さん、ありがとっ！ ……お父さんよりは早く帰るよ」

察してくれた母の優しさに笑い返して手を振ると母に背中を向けて道を曲がる。もう、歩いていられなくなった。

久美子は走り出す。

学校のそばに「篠神神社」という小さな神社があった。

境内には大きなサクラの木。この町で一番古いと伝えられている。

久美子にとって大事な場所。

神社の入口から一気に石段を駆け上がる。登りきったら、お堂の正面。鳥居に手を付いて息を整えた。

「はあ、はあ……あつい」

コートを脱いで、賽銭箱の横に置く。境内はそんなに広くない。

「クミ」

呼ばれて振り返ると、学ランにコートを羽織った浩志がいた。

「ヒロ、やっぱり来てたのね」

浩志は頷いた。

「卒業したんだな、俺たち」

「おめでとうって気持ちになれないんだよね。やっぱり」

二人は頷いた。

そして同時にサクラの木を見あげた。

「わたしは誰にも言ってないよ」

「俺だって、言ってない」

「ヒロ」

久美子はサクラから浩志の方へ視線を向けた。

「どうして、遠くへ行っちゃうの？」

浩志は、久美子の方を見ずにサクラを睨んだ。

サクラの花は咲いていない。

「仕方ないだろう。父さんが転勤しちゃうから……高校は東京に行くつもりだったし。丁度いいって。大学も東京だろうし、お前も来るんだろう？」

久美子は答えない。

三年後、自分がどこの大学に行くかなど、今日卒業式を終えた中学生に答えられることじゃなかった。

「本社勤めって凄いんだって。本当なら喜ばないといけないんだけど……俺がこんな風だから、母さんが怒って。兄ちゃんとも再来週から一緒に住めるし。うん、家族的には、良いこと尽くめ。そう、思わないといけないのはわかるけど」

浩志は久美子を見る。二人の目が合うと、久美子は下を向いた。

「ずっと、一緒にいるって言ったじゃない」

「うん」

「一人にしないで」

「わかっている、でも」

家族と離れて暮らすという選択肢を浩志は持てる年齢じゃなかった。

「……しょうがないんだ」

久美子の腕を掴む。浩志の指は、少し震えていた。

「ごめん、クミ」

「嫌だよ！」

久美子は首を振って浩志の手を取った。

「行かないでよ！」

そんなこと無理だと久美子は気付いている。

でも、言わずにはいられない。

「私、この場所に本当の独りぼっちになっちゃうよ」

久美子の声は悲痛だった。

「クミ、俺は」

久美子は首を振り続けた。浩志の言葉を全部否定するように、イヤイヤを続ける。

「聞きたくない、聞きたくないよっ！」

お別れが怖かった。

「クミ……ごめんな」

泣きそうだった。浩志は、何も言えなくなる。

これ以上、何か言ったら久美子の目から涙が零れるだろう。もう、泣かせたくない。

「ノブ……」

浩志が助けを求めるように、サクラを見た。

久美子もキラキラと潤んだ目をサクラに向けた。

二人だけの秘密。

二人だけの、誓いのモノ。

それがノブだった。

浩志はそっと久美子の背中に手をやると、サクラの木へと一緒に歩き出す。

「もう一度、ノブに手紙を読もう。そしたら、会えるかもしれない。なあ、クミ。お前を一人にしたくて俺は引っ越すわけじゃない。ノブだって、そうだよ。ノブさえここに戻ってきたら、お前は一人じゃないだろう？」

久美子は頷いた。

そして二人はサクラの根元にしゃがみ込む。

小学生最後の春休みに埋めたものを掘るために。

出会い

二人がノブと出会ったのは四歳のときだった。

浩志と久美子は同じ幼稚園のクラスで出会った。

入園式の日。

活発な久美子は浩志を連れ出して篠神神社に来ていた。

「ヒロ！ みてみて！ おっきなお花があるよ！ サクラ！」

「うーおはなあ！ さくらあ！」

四歳で言葉を自由自在に操る久美子に比べて、浩志は少し舌足らずだった。

「ヒロ、速く！」

そして行動も久美子の方が速かった。

「クミちゃんまってえ」

久美子は振り返り両手を腰に当てて怒った。

「ヒロ、あたしのコトは、クミって呼ぶのお」

「うークミ」

「よし！ 今度ちゃんって呼んだらごっちんって怒るからね！」

「んーなんでえ？」

久美子は浩志に抱きついてキスをした。

「だって！ ヒロとクミはけっこんするんだもん！ だから！ ふーふはね、よぶときにちゃんって、いわないのよ！ わかった？」

また久美子はぎゅーと浩志を抱きしめた。

数センチ久美子の背が高いので抱っこしているように見える。

「うん、わかったよお」

舌足らずで頷く浩志に久美子は満足そうに笑った。

「じゃ、けっこんゆびわをさがしましょ！」

「えー？ ゆびわ？」

「そう！ えっとねーなんでもいいよーわっかになっているヤツ見つけた子が勝ちねー」

久美子はそう言って下を向いてうろうろと地面を見てまわり出す。

浩志もそれに習って地面を見つめた。

サクラの花びらが舞い落ちてきて、良い香りがする。

「クミちゃん、ピンクきれいだねー」

「こら！ クミっていいなさいよー」

「あ！ ごめん」

「いいよ！ ワザとじゃないからねー」

「ねー」

二人は笑い合ってサクラの根元に座った。

「ふわふわだねー」

浩志が新雪のように綺麗なサクラの花びらをぱっと手で払うと一面がピンク色になった。

「きゃー！　すごい！　ふぶきだぁーふぶきい！」

二人はキャッキヤとサクラの花びらをかけ合いっこしてはしゃいだ。

「ねえ、見つけたよ」

そのとき、二人は男の子の声を聞いた。

二人は声のする方を見る。

「だれえ？」

浩志が声の主を見て首を傾げた。サクラの幹に片手をかけてにっこり微笑んでいる男の子。

男の子の周りにはサクラの花びらが舞っていた。

「.....サクラのようせいさん？」

久美子が言うと、声の主はにっこりと笑った。

「クミ、ヒロ、僕はね。ノブだよ」

ノブは二人と同じ四歳くらいに見えた。久美子より背は少しだけ高い。

「ノブ？」

「うん、そうだよ。二人のこと待っていたんだ。ずっと」

ノブはニコニコと笑うと、二人に手の中の物を見せた。

「見て！」

二人はそれを覗き込むと歓声を上げた。

「うわ！」

「ゆびわだぁ！」

それはシロツメグサで編んだ指輪だった。

「王冠も作れるんだ」

さっと、久美子に王冠被せると感激して飛び上がった。

浩志が羨ましそうにいう。

「ノブ、俺のは？」

「じゃ、みんなで作ろうか？」

「「うん！」」

三人は友達になった。

その日はシロツメグサをいっぱい摘んで王冠を作って三人で結婚式をした。

3人だけの秘密

小学校に入学式の日、二人はノブの所に行った。ぴかぴかのランドセルを見せるためだ。

「「ノブう～！」」

久美子と浩志は満開に咲き誇る桜を見上げた。こんなに綺麗な花は見たことがないというほどに、見上げた空いっぱいに桜のピンクが埋め尽くしていた。

「こんにちは、クミ、ヒロ」

桜吹雪の後、ノブは桜の枝から飛び降りてきた。三人そろって笑い合う。ノブも二人と同じくらいの背丈になっていた。

「ね、見てこれ！」

今日もらったばかりの教科書を桜の根元に広げた。

「これで書くの」

母が準備してくれた鉛筆や筆箱をノブに見せる。

「私のプリキュアのだよ！」

「俺はねーメジャーの！」

ノブはニコニコと二人の話を聞いていた。

「あ、ウサギが学校にいるんだ！」

「ノブも一緒に行こう！」

「うん！」

三人で小学校に戻った。

ウサギ小屋の隣にも桜の木はあるがノブがいる桜よりはずっと見劣りする。

「ウサギは何食べるのかなあ」

えさをあげたくてクミはヒロに聞く。

「えー草じゃない？」

「ウサギは何でも食べるよ！」

ノブはその辺に生えているクローバーを摘んだ。

「これも食べるよ」

差し出した草をウサギはもぐもぐ食べた。

「いいな！ わたしも！」

「俺も！」

三人でウサギにえさをあげた。

一生懸命ウサギにあげる草を摘んでいると、クローバーの中にシロツメグサもを見つける。

「王冠つくろうよ」

久美子が毎年やる春の遊びを思い出す。

でも、この辺の草はほとんどウサギにあげてしまった。少ししか、シロツメグサを見つけられない。

「桜の木に帰ろう。あそこなら、いっぱいあるから！」

ノブの提案に二人は頷いて、篠神神社に戻った。

そこで三人でもくもくと花を摘む。

「なんで、ノブは学校にこないの？」

王冠を三人で編みながら、久美子は聞いた。

「だって、僕はクミとノブ以外には見えないし」

「「あ、そっか」」

幼稚園児の時に会ったノブは二人にしか見えないことを理解していた。

親が迎えに来ててもノブは大人に見えなかったのだ。

三人で遊んでいて、そのことは慣れっこだった。

でも、ノブだけがずっとこの場所にいるのは寂しい気がした。

浩志が気付いてノブに願うする。

「でもでも、学校に遊びに来てくれる!？」

「いいよ」

ノブはあっさりとはOKしてくれた。

「わーい！」

二人は飛び上がって喜んだ。これで学校でもノブは一緒だ。

ノブは笑った。

「でも、お願いがあるんだ」

「何？」

二人は興味津々に聞いた。

「僕のこと、誰にも言わないで」

ノブはしーいと口元に指を立てた。

「僕のこと見えるのは二人だけだから、僕の話はクミとヒロの秘密だよ」

三人だけの秘密に久美子と浩志はわくわくした。

「「うん！ もちろんだよ！」」

凄く楽しくなった。

大切な友達のノブ。それはクミとヒロの一番大事な秘密だった。

ノブは約束通り時々学校に来た。そして、姿を見せて久美子や浩志が気付くといつも「しーい」と笑いながら口に指を立てる。みんなには見えていないノブ。だから、ドキドキとわくわくで二人は学校が楽しくなった。

三人だけになるとみんなが気付かないのが面白くて笑った。

遠足も、運動会も、いつでもどこでもノブは一緒だった。三人はずっと一緒だった。

クミとヒロのケンカ

小学四年生の春。

久美子は泣きながらノブの所に訪れていた。

「ノブ！ ノブ！」

毎日のように三人で遊んでいる大事な場所。

今年も美しくサクラは咲き誇っているのにノブはいくら呼んでも現れない。

「えーん、ノブ、ノブ！ ヒロがねヒロがね」

泣きじゃくりなら久美子は浩志がやった酷いことをサクラの木に話かけ続けた。

四年生になった久美子と浩志はクラスが一緒になった。小学生になって初めてのことだ。

嬉しくて久美子はしょっちゅう浩志の席に行こうとしたが浩志はクラスの男子たちと一緒に遊ぶことばかりを選び、今日はとうとう久美子にこう言った。

「ウザいんだよ！ 女子と遊んでいるヒマないって！」

そして浩志と男子たちはボールを持って外に行ってしまった。

久美子はショックだった。

浩志にウザいと言われたことも久美子を浩志が「女子」としてくくったことも。

「ノブ、なんで。なんで出てきてくれないの？」

本当に一人ぼっちになってしまった久美子は泣きながら家に帰った。

次の日も久美子はノブの所に来ていた。

今日もノブに会えないかもしれないと思いながら、しょんぼりと神社の階段を登っていると声が聞こえてきた。

「ノブ！ ノブ！」

浩志の声だ。

昨日久美子がやったようにノブを呼んでいる。久美子は浩志に見つからないようにそっと隠れて様子を伺った。満開のサクラからノブが出てきた。

「どうしたの？」

昨日はいなかったのに。と久美子はむっとして二人を見る。

「クミが、クミが酷いんだ」

ノブは笑った。

「どう酷いの？」

浩志は泣きそうになりながら言った。

「小学校に入って初めて同じクラスになったんだ。でも、クラスでは男友達と遊びたいし、話したい。しかも、久美子とクラスで仲良くしてたら、いじめられるっていうか、からかわれるから」

「うん、そうかも」

「クミがいじめられたら、嫌だ」

ノブが頷いた。

「それなのにクミは学校の外で、俺のこと無視したんだっ！」

久美子は心当たりがあった。

今朝、会ったとき。いつもなら一緒に学校まで楽しく行くのに、昨日言われたことが悲しくて腹立たしくて、浩志が話しかけてくるとイライラした。

「俺、ただクラスの中では仕方ないと思っただけで。クミのこと今まで通り大事なのに」

浩志は泣き声だった。

ノブは優しく浩志の背中を撫でる。

「クミにそのことを言えば大丈夫だよ」

ノブの声は本当に優しい。浩志は泣いた。久美子も泣いてしまった。

急いで二人の前に走っていく。

「ヒロ！」

浩志は慌てて涙を拭いて久美子を見た。

「クミ……」

「誰がヒロをいじめんのっ！」

久美子は怒りの矛先が変わっていた。

「え」

「わたし、クラスでもヒロを大事にしたいのっ！」

浩志の手を掴んで久美子は見据えた。

「無視してごめん」

「俺もごめん」

ノブが笑った。

「クミ。落ち着けよ」

ノブは久美子と浩志と同じ歳の外見になっていた。

「クミはクラスに女子の友達いるだろ？」

久美子は頷いた。

「じゃ、クラスではいいじゃないか。もしかしたら二人だけ孤立しちゃうよ。クラスの子も気を使うだろう？ だから、学校が終わってからいつもみたいに三人で遊ぼうよ。別のクラスの時はそうだったんだろ？」

二人は黙る。

「クミもヒロも同じ気持ちだよ。二人とも僕と会ったときと何も変わってない」

久美子は浩志が大事で、浩志も久美子が大事だ。

「二人は特別のままだから、他の友達と、学校に行っている間しか会えない子たちと、交流した方がいい」

ノブは柔らかく笑った。

「僕も良く学校に見に行っているからわかるよ」

小学一年生のときに約束した通りノブは時々学校に来ていた。浩志と久美子にしか見えない、秘密の友達。学校でノブに話しかけるのは、三人になったときだけだ。

「二人とも、今年も今まで通り上手く行くよ」

ノブがそう言うと、その通りの気がした。久美子は悩んでいたことが解決して晴れ晴れしい気持ちになった。浩志もだ。

「ヒロ、考えてくれてありがとう」

「ううん、俺こそ。きちんと理由も言わずにあんなこと言ってごめん」

いじめられているわけじゃない。ノブが言ったとおりに心配しているだけだ。

「クミが女子と話しているとちょっと寂しかったけど、クミも俺が友達と遊んでいるの見たとき同じ感じだったんだ」

「うん、でも」

ノブの手を取った。

「二人は特別だよね」

三人は頷いて、満足そうに笑った。今年も美しくサクラはその笑顔を見てくれた。

ノブの別れ

六年生の冬。

学校帰りに二人はノブの所に来ていた。

毎日のように宿題も遊びも篠神神社でしている。

「ノブう」

わからない問題があって久美子は桜を見てノブ呼ぶ。ノブはとても頭がいい。わからない問題をいつも教えてくれていた。先生よりもわかりやすい。

「今日はまだ出てきてくれないな」

浩志も廊下に寝そべて問題を解いていた。

「ノブがいるからわたしたち塾に行かなくて済んでいるもんねー」

親も浩志と久美子がここで一緒に勉強していることを知っている。

二人の成績は文句を言わせないくらい優秀だ。

神社の建物はそんなに大きくはない。そんなに古くなく立派だった。

無人の所でたまにそれっぽい人を見かけるが四歳のときから毎日のように通っている久美子と浩志はここに居て咎められたことはなかった。雨の日もこうして屋根のある廊下で勉強したり遊んだり。三人は相変わらずいつも一緒だった。

「ノブ！」

もう一度桜の木に向かって久美子は呼びかける。

茶色い枯葉を少しだけ残した桜の木は葉っぱを風に揺らしたただけだ。

「おかしいな」

浩志も不審がって顔を上げた。

心配になった二人は急いで宿題を終わらせると桜の木に触れた。

木はとても冷たい。

「ノブ？」

二人で木の幹に耳を当てた。

『クミ、ヒロ』

微かに、ノブの声が聞こえた。

「ノブ！？」

「どうしたの！？」

弱々しい声に二人は驚く。昨日まで、いつもと変わらずに一緒に遊んでいたのに。

『ごめん、ちょっと待ってね』

しっかりと耳を幹に付けてノブの声を必死で聞き取ろうとした。

「おまたせー」

「「うわっ」」

ノブは普通に現れた。

ちょっと困った顔をしている。ノブも二人と同じくらいの年齢になっていた。

「ノブ！ びっくりするじゃん！」

「どうした？」

むっとしてノブを見ると、二人にニコニコと言った。

「実は、凄く言いづらいんだけどさ」

ノブはサクラを見上げた。

「僕、これまでみたいだ」

二人は意味がわからなかった。ノブの笑顔は複雑だった。

久美子が首を横に振った。

「何？ 何言っているの？」

「うん、あのね」

ノブはしばらく黙って、言った。

「この木、もう咲かないんだよ。終わりなんだ」

ノブは苦笑した。

「だから、僕は行かないといけない」

「どこへ？」

ノブは困った顔をした。わからないと小さく呟いた。

「嫌だよ、ノブ。なんで？」

「ごめんね、でも、きっとまた会えるよ、絶対に会えるから」

ノブの姿がどんどん薄れていった。

「行かないで！ ノブ！」

久美子は叫ぶ。ノブに触れようとしたら、すっと手がすり抜けた。

「嫌！ イヤ！ なんで！？ どうして！？ いやだよお！」

「ノブ」

浩志は久美子の叫び声を聞きながら呆然と薄れていくノブを見つめた。

ノブはふっと笑う。

『大好きだよ。クミ、ヒロ。』

僕、二人に会えてよかった。

本当に良かった。

二人がいなかったら、僕、待てなかったから。

ありがとう、ありがとうね。

二人が喧嘩したとき、実は泣きそうなくらい悲しかった。

でも、三人、ずっと一緒にいられて、僕、すごく幸せだった。

……きっとまた』

だんだん声まで聞こえなくなってくる。

『ありがとう、クミ、ヒロ』

ごうっと風が吹き付けた。強風の後、砂埃が止み、ノブの姿はすっと消えた。

微かに声が風に流れてきた。

『また、会おう』

静寂の中、二人は無言で立ち尽くす。

突然すぎる別れに、何も言えなかった。

夕日が赤く空を染め始めた頃、久美子がサクラの木に向かって大声を上げて泣き喚いた。

静寂は悲痛の叫びに切り裂かれ、夜が訪れる。

二人で抱きしめたサクラの木は、すごく冷たかった。

いつまでも、二人でサクラの木にしがみついて泣いていた。

六年生。小学校の卒業式の日。

サクラに今年は蕾が一つもない。もう、咲かないのだとわかった。

「ノブ……」

卒業式の晴れ姿のまま、二人はサクラを見上げる。

「クミ」

浩志が久美子の手を繋いだ。

「俺、ノブはいると思うんだ」

久美子が頷いた。

「たぶん、声は聞こえると思う。だから手紙を読もう」

また頷いた。

「それで、手紙埋めよう」

久美子は浩志の言葉に頷くことしかこの日は出来なかった。

春休みのある日。

二人は書いた手紙を読んで、ササBOXに入れた。

ササBOXは有名な弁当屋の名前だ。缶で出来た弁当箱は小学生でも簡単に手に入れられる一番丈夫な入れ物だった。

それをサクラの木の根元に埋めた。

「クミ、これできっとノブの手紙が届くよ」

「ノブ」

名前を呼んでも、ノブは出てきてくれなかった。

中学一年生の入学式。

町中のサクラは咲いているのに篠神神社のサクラは咲くことはなかった。

久美子は泣いた。浩志も久美子の居ないときに泣いた。

この日の悲しみは忘れない。

絶対にノブのことは忘れたりほしない。

会いたい思いが募っていく。サクラの花は次の年も咲かなかった。

そして、久美子と浩志は中学の卒業式を終えた今、サクラの木の根元を掘っている。

ササBOXが出てきた。この中に小学生最後の春休みにノブに宛てた手紙が入っている。今でも内容は覚えている。

浩志はそれを取り出して、土で汚れた表面を払う。

「クミ、手紙読んで。俺はこの町を一時離れるけど、クミとノブのことずっと特別だから」

久美子はノブが消えた日と同じく、浩志の言葉に頷くことしか出来なくなっていた。

缶のフタを浩志が開けた。

「え」

ササBOXの中にはぎっしりとサクラの花びらが入っていた。それが零れ落ちて、地面に降る。

「なんで」

二人は覚えが無かった。サクラの花びらを退けても二人が入れた手紙はなかった。

いたずら？

でも、この花びらは一体なんだろう。サクラは咲いていない。町中のサクラの木は蕾が膨らみ始めていたが、今年はまだだ。

「……ノブ？」

ノブが受け取ってくれた。そして、返事の変わりにこの花びらを。最後の花びらを久美子と浩志に届けたのだろうか？

二人は言葉をなくして、その花びらをじっと見つめた。

平凡な缶の弁当箱。

こんな小さな箱が一気に不思議なものと化した。

こぼれ落ちる花びら。

風に舞って空に舞い上がる。

今の季節にないサクラを目で追う。二人とも何も言えなかった。

「ノブ」

浩志が泣きそうな声で何度も呼んだ。久美子の頬に涙が流れる。

会いたい

その思いでいっぱいだった。

突風が吹く。

風に全ての花びらが持っていかれる。

ああ、終わってしまうんだと二人とも思った。ノブのと繋がりが全部消えて行く。

視界がサクラでいっぱいになって二人でササBOXを握りしめた。

目を開けるとそこにあるはずの大木はなかった。神社もない。

「クミ？ これって」

浩志の声が震えている。

「ヒロ」

お互いの手を握り締める。二人は辺りを見回した。

ここは、どこなんだろう？

さっきまでノブのサクラの根元に居たはずなのに。ここは何もない小高い丘に立つこの町で一番高い場所。

「学校は？」

神社の隣に学校がある。丘の端まで行って学校を確認すればそこには畑が広がっていた。畑の中に小さな木造の学校らしきものが建っている。

「なんで？」

二人にはわけがわからなかった。

混乱していると誰かがこっちへとやって来る。腕には小さなサクラの苗と男の子を抱えて登ってきた。

「ごめんなあ、兄ちゃん、こんなことしか出来なくてごめんなあ」

男は泣いていた。

ノブのサクラが生えていた場所にしゃがみ込むと男の子と苗を下ろした。

「ごめんなあ、守ってやれなかった」

男は地面を掘り始める。道具は小さな木片だけ。時間をかけて男の子が入れるくらいの穴を掘った。そこに男の子を横たえる。

「おやすみ、ノブ」

二人は凍りついた。

ノブ？

慌てて、男の所へ駆け寄る。男には二人の姿は見えないようだ。男は泣きながら男の子に土をかけて行った。

その子は

「「ノブ！」」

二人は叫んだ。そこに埋められそうになっているのは、ノブだったのだ。

「待って！」

「おい！ やめろよ！ やめろ！！」

二人の声は男に聞こえない。浩志は男に掴みかかったがその拳は男の体を擦りぬけた。

「なんで、なんでだよ！」

浩志はそのまま地面を殴った。

久美子は泣きながらノブを抱きしめようとするがすり抜ける。男が被せる土も久美子の体をす

り抜けてノブにかかって行く。

「嫌だ、いやだよ」

「ノブ、ノブ」

男は泣きながら作業を続けていた。すっかり土の中に葬られたノブはもう見えない。掘り返そうとしても浩志と久美子では触れないのだ。男は作業を終えると小さなサクラをノブの上に植えた。

「ノブ、お前は優しい子だ。兄ちゃんやこの町を、ずっと、ずっと見守っていてくれ」

何度もそう言いながら根を叩いていた。

「美しく咲いてくれ」

男は最後にそう言って立ち上がる。

「ノブ、兄ちゃんは山と川を越えて東京に行って来る。そこで皆の分までがんばるから、だから、この町のこと頼んだよ。絶対に、絶対に兄ちゃんががんばるから」

涙を拭って男はサクラに背を向けて丘を下っていった。

浩志が久美子の手を握る。

「ここは、きっと過去なんだ」

「ノブは、死んじゃっていたんだね」

小さなサクラの苗が心細く風に揺れる。久美子と浩志が生きる時代には、このサクラは町で一番古いサクラとして美しく咲き誇っていた。今はもう花をつけていないけど。二人はその美しい姿を知っている。

「このサクラはノブのお墓だったんだ」

久美子は頷いた。ノブの体はここに埋められていた。

幼い時は疑問に思わなかったノブの存在。二人は今でもノブはサクラの妖精だと思っている。

「クミ」

浩志は久美子を立たせてサクラから下がった。

「ノブはここにいるよ」

「うん」

二人でノブを呼び続けた。きっと会える。信じている。

二人は手を繋ぎノブを待った。

サクラの木が風に揺れる。

「あ」

いつからそこにいたのだろうノブがぼんやりとサクラを眺めて立っていた。

「ノブ！ 会いたかったよ！」

「どこいっちゃったんだよ」

二人でノブを抱きしめた。ノブは困った様子で二人を見る。

「君たち、僕が見えるの？」

首を傾けて不思議そうにそう聞いてきた。

「君たちは誰？」

二人は驚いた。

「ノブは、サクラの精霊なんだよ」

「え？」

「小さい頃からわたし達ずっと一緒だった！」

「ノブ、また会えて嬉しいよ」

二人は中学校であったことをずっと話した。ノブは黙って聞いてくれた。

「寂しかった」

「大好きだよ」

二人がノブに会えなかった三年間を話しくした後、ノブは優しく笑った。

ついさっき突然現れたノブは無表情で、悲しみとも寂しさともつかない顔をしていた。

自分が死ぬってどんな思いなんだろう？

自分が埋められるのをずっとそこで見ていたのだろうか？

久美子と浩志が想像も出来ない目にノブはあって、死んでしまったのだ。

それが、二人の話を聞いているうちに、ノブの顔は晴れ晴れとしたすっきりしたものに変わっていた。いつものノブだ。二人が大好きなノブの顔だった。

優しく、はきはきとしていて、どんなことでも知っている、どんなことでも出来てしまう、尊敬するノブ。

「僕、ここでこの町を見守って行こうと思う。またクミとヒロに会いたいからね」

久美子と浩志は嬉しそうに頷いた。

「二人の話しに出てきたように、勉強も教えられるくらい覚えるね。今は何もないこの村もきつと復興するんだね。未来は凄く明るいんだね」

ノブの穏やかな声が二人には心地よかった。

「ありがとう、クミ、ヒロ」

二人の手を取って、ノブは幸せそうに微笑んだ。

「僕は死んじゃったけど、凄い楽しみが出来た。なんだか二人のおかげで生まれ変わった気分だよ」

サクラを三人で見つめる。この木が大木になるまでまだまだ時間がかかるだろう。急に寂しくなってきた。

再会は夢の中

ノブから風が吹く。まただ。ノブは薄くなっていく。

「あ」

「ノブ」

慌てて手を伸ばす。

「未来で待っていて」

ノブの笑顔は寂しそうではなかった。

「絶対だよ！」

「またね！ ノブ！」

伸ばした手はもう届かない。

「うん、またね」

もう、声しかない。優しい風に巻かれて、クミとヒロは元の場所に戻ってきた。

大きな木、立派な神社。

もう花が咲かない、この街で一番大きなサクラの木。

「言えたね」

「うん、やっと言えた」

中学生の間、ノブが居なかった空白をこの短時間に全て埋められた気がしたのだ。ノブは、全部知っている。出会ったのは今の自分たちが先だった。だからノブは知ってたのだ。

そう、四歳の頃に初めて会ったとき、ノブは二人の名前を知っていた。

「ずっと、この場所で待っていてくれたんだね」

ヒロとクミは頷いて、サクラの木を抱きしめた。

「クミ。今度は俺たちがノブを待つ番だ。何年先でもいい。きっと、また会えるよ」

「うん」

ノブの優しい笑顔が見えた気がした。

その夜二人は同じ夢を見た。

ノブと満開のサクラの夢。

ノブが穏やかに二人に話してくれたのは、お別れの言葉。

とても不思議でとても温かいけど、寂しい夢だった。

『二人にずっとお礼が言いたかったんだ。』

ただの幽霊だった僕が心穏やかにこの町と兄を見守れたのは二人に出会えたからだよ。

もう一度、僕の大事な友達に会いたかったから、

一人でもずっと我慢できたんだよ。

僕が死んで、兄が僕を埋めた時。

初めて二人に会った。

サクラの木はまだ細くて、小さくて、花も数輪しか咲いてなかったね。

次に二人に会った時。

サクラはこの街で一番大きくて美しいサクラになっていた。

長い間、二人を待っていた。

再会した二人はまだ四歳で可愛かった。

死んだ妹と弟が同じくらいだったから、

兄弟に会えた気がしてすごく嬉しかったよ。

二人は友達で、親友で、弟と妹のようだったんだ。

クミとヒロが大好きだ。

ねえ、きっと、絶対に会えるよ。

僕のこと、忘れないで。

クミ、ヒロ。ありがとう』

クミとヒロが書いた手紙も読んでくれた。

この言葉はその手紙の返事なんだと思った。

朝、目が覚めた二人は涙が止まらなかった

浩志は春休みの間に引っ越して行った。

町に残った久美子は、家から通える高校に進学した。

高校二年生の自由研究でノブの生前の姿とあのサクラの歴史を知ることになった。

ここに一つのドキュメンタリー映像がある。全ての答えはここにあった。

『ササBOX創業者 篠神吉太郎物語』

全国にチェーン展開している『ササBOX』

創業者、篠神吉太郎が戦後東京の奉公先の旅館で仲間数人と立ち上げ数年後独立。当時はおにぎりや漬け物を笹の葉で作った容器に包むだけと形だった。そのシンプルさと使い捨てで使える容器として大流行。経済成長時には『笹弁当』として全国展開。その後海外に進出を機に屋号を「ササBOX」に改名。

その後世界でジャパニーズファーストフードとして認知され海外に日本食を広めた火付け役として有名だ。

そんな創業者篠神社長には悲しい過去がある。

神奈川県蔵川市（当時は市ヶ谷村）に生まれ十六歳で召集された。

戦争の激化に伴い国内に帰還することがままならないまま終戦。

その混乱の中何とか篠神は帰り着く。

しかし、村は貧困と疫病、台風災害の影響で生存者は殆どおらず、篠神の家族も一人の弟を残して全員死亡していた。

篠神は弟信彦のために賢明に看病をしたがその数ヶ月後息を引き取った。

何もかも失った篠神が川辺で弟の亡骸を抱いていると行商が通った。

行商が背中に背負った一株のサクラを見て、篠神は行商に頼み込んだ。

「すみません、弟が死にまして、墓も立ててやれません。そのサクラを墓標代わりに譲ってもらえませんか？」

行商は亡骸と篠神を見比べてから頷いた。

「もちろんですよ兵隊さん。私は帝都からずっと川沿いを辿ってやってきました。この村にもサクラが復興をお祈りします」

篠神は町が一望出来る小高い丘の上に弟とサクラを植えて、村の復興を誓い東京にやってきた。

東京で弁当屋が成功し、一時代を築いた篠神は自分の故郷に帰ると、サクラは美しく咲き誇っていたという。

その時の感動は忘れられない。

篠神は私財を投じてそのサクラを町中に植樹した。学校や公共施設、河合沿い、全てを篠神のサクラが親木だ。篠神は弟のサクラのある丘に「篠神神社」建立し町の守り神としてサクラを奉

った。

町はいつしか大きな市へと発展しサクラの町『蔵川』として有名になった。

優しかった弟の心に助けられたと篠神は語る。

「弟があの時生きていなかったら、私に未来はありませんでした。

サクラをあんなに美しく咲かせて待っていてくれなかったら、

私は欲だけの人間になっていたはずです。

弟のサクラが私と町と会社をこんなに素晴らしく導いてくれたと、思っております」

ササBOXは花見弁当の定番として毎年全国の人が利用している。

創業者篠神壱太郎のインタビューはこう締めくくられていた。

ノブ。優しいノブ。

「私は蔵川のサクラをノブサクラと呼んでいます」

たった、十五歳でこの世を去った篠神信彦はサクラになって、今もこれからも町中に咲き誇っている。

「私は、蔵川に帰ってサクラを見ると「ただいま、ノブ」という気持ちになるんです」

ノブの兄はそう穏やかに微笑んでいた。

久美子はこの映像と自分の書いたレポートを浩志に送った。

それを見た浩志はすぐに久美子に電話をした。

『見たよ』

浩志は泣いていた。

『俺、絶対に帰る。ノブとクミのところに帰るから』

久美子は頷いた。信じている。また三人で会えることを。

『ササBOXの社長に会えないかな』

久美子は残念な知らせを言う。

ノブの兄は、ノブのサクラが枯れる数年前に他界していた。

「私たちが小学生の時、もう居なかったんだ」

ノブは辛かったはずなのに、いつも笑っていてくれた。

「私がノブに会いに行ったときノブが居なかったことがあったの。だからそのときかなって」

浩志は違うと答えた。

『ノブは俺たち二人がそろったときじゃないと会えなかったんだよ』

「え」

そのことに久美子は今気付いた。

『俺はずっと前から知っていたけどね』

「なんで？」

『俺とノブが二人きりで話していたとき、クミがどこかに隠れていて聞いているって知っているし』

盗み聞きまでばれていた。

「ひどい、今まで黙っていたなんて」

『そっちこそ』

浩志は嬉しそうに笑った。

『俺はクミのことすごく好きだって知っているのに、何も言わないままじゃないか』

さっきまで泣いていたくせに生意気だ。少しむっとしたが、久美子の胸はドキドキしていた。
電話でよかったとさえ思う。

『クミ、待っていてね』

「うん、待っている。ノブと一緒に待っているね」

きつとずっと。

今年も街にサクラが咲き誇っている。

久美子はもう咲かないサクラの木の根元で浩志を待っていた。

この春から、浩志はこの町で弁当屋を開店させる。

「クミ」

「おかえり、ヒロ」

「ただいま、クミ、ノブ」

大人になった浩志は久美子より背が高く、サクラの木の枝に余裕に手が届く。

「三人そろったね」

「そうだね」

久美子は赤くなって下を向く。

丘から見下ろす町は、ノブのサクラでいっぱいだった。浩志はそっと久美子のお腹に手を当てる。

久美子のお腹の中には、浩志との子供が宿っていた。

二人は幼馴染の関係から恋人に発展していた。もともと浩志は久美子のことが好きだったんだと告白してから恋人同士になった。

浩志は大学卒業後『ササBOX』に就職した。

久美子は夢だった看護師になった。

ノブが待つ街の病院で働きながら浩志を待つことにしたのだ。

数年後。

浩志はがんばりが認められ蔵川市で新店舗の店長に抜擢され、見事故郷に錦を飾った。

もうすぐ二人はこの街で結婚する。

「ノブは俺たちの子供だったんだ」

生まれ変わりを信じる？

三人は出会うべくして出会ったのだ。二人はノブとの再会をいつも夢見ていた。

子供が生まれて二人は「信人」という名前を付けた。

三人で篠神神社を訪れる。

「お母さん、お父さん」

最近はっきり話せるようになった大事な息子。

もう花を咲かすことのないサクラの木は三人のお気に入りだった。

「「ノブ」」

二人は優しくわが子と呼んだ。愛情たっぷり注いで育てていこう。この街でノブのサクラに囲まれて生きていく。

篠神の名は永遠に残る。

ノブサクラ（ソメイヨシノ）

ササBOX創業者篠神壺太郎が弟信彦の墓として植えたサクラを親木としたサクラのこと。
蔵川市内やその近辺、市内を横断する市ヶ谷川沿いに植えられている。

親木であるサクラは今は花をつけず、完全に枯れてしまったが
篠神壺太郎が弟と家族、町のために建立した「篠神神社」のご神木をして
今もそこに立っている。

サクラが枯れたのは、今から十八年も前のことである。

町はシンボルとして篠神を称え、町の木になっている。

優しかった人は今もここに眠り続ける。

サクラと君

<http://p.booklog.jp/book/46303>

著者：黄月

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/oasis105/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46303>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46303>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.